



竹千代賞

私と日本語

山下朋夏

『I am a cat』書店でたまたま目にしたのは夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の英訳本だった。そのタイトルを見て、私は吹き出してしまった。吾輩の、偉そうで男性的な印象が微塵も感じられなかったからである。名前のない猫の目線で人間社会を辛辣に描いたこの名作は、吾輩という一人称だからこそ伝わる意図やユーモアがあると思う。しかし、吾輩を英訳したくても、『I am a cat』以外書きようがないと気づかされた。日本語の一人称は思いつくだけでも、わたし、わたくし、僕、俺、うち、わし、わらわ等、様々な種類がある。一人称から年齢や性別、出身、身分、性格などを表現できるのだ。日本語の魅力のひとつは、この多様性にあるのではないかと思う。それゆえに難しいが繊細で美しい。

普段、友人との会話では「やばい」「えもい」という言葉が非常によく登場する。特に「やばい」はとても便利な言葉で、一語でたくさんの意味を持っている。すごい、可愛い、おいしいといったポジティブな感情を表すこともあれば、不穏、気持ち悪いといったネガティブな表現にもなり万能だ。とりあえず「やばい」と一言で片づけられるのだから、発信する側はとても使いやすい。しかし、受信する側になると、何がどう「やば

い」の的的確に伝わっていないこともある。「これやばいね。」と共感を求められても、褒めているのか、けなしているのか区別できず、結局「やばいね。」とオウム返しでその場をしのいでしまう。時代とともに柔軟に変化をとげた「やばい」は、私たちの世代の感性や勢いが感じられ、決して悪い言葉とは思わない。ただ、感情の機微を表現する美しい日本語がたくさんあるのだから「やばい」一辺倒ではもったいない気がする。

春先にバスに乗っていた時のことだ。私の隣に一人の女性が座り、目的地に着くまでしばらくおしゃべりをした。私と同じ年のお孫さんがいて、離れて暮らしているそう。私が吹奏楽部に所属していると話すと、偶然にもお孫さんも同じ楽器を吹いているらしく、話はずんだ。会話はとても楽しかったが、私は終始聞かれたことに簡単に答えるだけに徹していたように思う。というのも敬語が苦手で自信がなかったし、女性の上品な言葉遣いに気後れしてしまい、いつものようにこちから質問を投げて、話をふくらませることができなかったのだ。日ごろ「やばい」だけでコミュニケーションが成立している私にとって、敬語はかなりハードルが高い。「見る」という意味の言葉だけでも、「ご覧になる」や「拝見する」を使い分けなくてはならない。相手によって表現が変わる敬語は複雑で厄介だが、これもまた日本語の美しさであると思う。

静岡駅につくと、女性は

「オメモジできて嬉しかったわ。」

と言って去っていった。オメモジ。初めて聞く言葉で印象的な語感だった。流れからおそらく「お話しできて嬉しかった。」という意味だろうと思っていた。帰宅後、気になり辞書を引くと、御目文字と書き、「お目にかかることをいう女性語」であることが分かった。女性のみが使う謙讓語、日本語の奥深さを感じる。まだまだ知らない美しい日本語がたくさんありおもしろい。

一方で私は中学校で英語を学び、日本語とは違う難しさやおもしろさを感じている。七月に台湾の中学生との交流会があり、私たちは合唱を披露したり、折り紙を教えたりする機会を持った。私のつたない片言の英語で意思の疎通がはかれた時は、何とも言えない達成感と充実感に満たされた。英語を学ぶ意義を肌で感じた瞬間



間だった。2020年には東京オリンピックが開催され、小学校でも英語教育が導入される。日本の国際化はますます加速し進んでいくだろう。今後、国際化に対応していくには外国語の習得は必要不可欠だ。しかし、まずは日本語の習得があつてこそ成り立つのではないかと思う。日本語での表現また理解なくして、異なる言語、文化を背景とする人とのコミュニケーションを図ることはできない。日本語の基盤を固めることが外国語習得への近道であると思う。

日々の暮らしの中で、日本語は複雑で難しいと感じることが多い。しかし、それ以上に日本語がもつ多様性や奥深さ、美しさに心を動かされる。私たちの生活は言葉で彩られている。美しい日本語は、人生をより美しく彩ってくれる。正確に情報を伝達し、理解し、感情を共有するために、語彙力を高め、表現の引き出しを増やし、美しい日本語を身につけていきたい。